

Travesties の中の *The Importance of Being Earnest* とワイルド

伊勢村 定雄
(立教大学大学院博士後期)

オスカー・ワイルドの *The Importance of Being Earnest* (1894) (以下 *Earnest* と簡略する) とトム・ストップパードの *Travesties* (1974) との関係はこれまでも度々指摘されている。ストップパードは *Earnest* を利用して *Travesties* を書いたが、一方が他方を勝手に利用できるほど、事は簡単ではない。後に書かれたものが、全て先に書かれたものに対して、完全にコントロールする力を行使しえるかどうかを確定するには、その双方の関係性を吟味しなければならないからだ。

ワイルドとストップパードの作品を比較検討するとはいえ、ストップパードがワイルドを一方的に取り込んでいるので、そこには厳然と年代的な限界というものがあリ、後作の中からワイルドの *Earnest* を考えるというスタンスを取らざるをえない。*Travesties* の中の *Earnest* について見るためには、*Earnest* がいかなる芝居であるかということの理解が必要となるのである。先ず、*Earnest* においてはいかなる言説が支配的であるのかを指摘し、次に *Travesties* の中の *Earnest* を問題とする。成立年代から言うと、両者の間に80年の年月の隔たりがあり、後作が前作を一時的にその言説に取り込みつつ、作られた作品であると言うことも可能である。しかしストップパードは *Travesties* の中に *Earnest* の言説だけでなくワイルドその人をも取り込むことによってさらに複雑なものにしている。その取り込み方を考えるために、*Earnest* における言説とその効果について考え、さらに *Travesties* の中の両作品の関連だけでなく、芸術論争におけるワイルドという名前の働きにもまた注目する。*Earnest* では Ernest という名前が都会と田舎とで二人の若い男性によって使用される。その名前自体が19世紀のイギリスの価値観を表すものであり、その名前の持つ言説に翻弄される人物像をフェースの形で描いたのがワイルドの *Earnest* という作品であると言えよう。

これに対してストップパードはワイルドの芝居の一部を利用してワイルドという人物までも導入し、結果としてワイルドそのものを記号として用いるに至る。それが “Art for art's sake” をめぐる芸術論争である。だが、この脈絡のなき背景は、*Travesties* という芝居がコラージュという技法を使ったフェースの特徴を持つことによるものである。それを可能にしているのは、劇中で行われたという報告のある J・ジョイスや H・カーとい

う人達による *Earnest* の公演であり、両作品に共通する名前を持つ登場人物の存在である。それらが二つの作品を結び付ける働きをすることになる。

であるから、*Travesties* には *Earnest* のみならずオスカー・ワイルド自身の関係性の環が入り込んでしまっていることがわかる。ストップパードが、ワイルドの作品 *Earnest* やワイルドの発言の一部を取り込もうとした時、そこには意図すると意図せざるとを問わず、ワイルドという存在が、時代の指標として、厳然と自己主張をしているのが読み取れる。「批評家としての芸術家」として、*Earnest* という作品を書いたワイルドという作家の名前が、今度は芸術をはかる指標として登場し、その名はヴィクトリア朝における Ernest という名前と同様に記号化されて、*Travesties* の芸術論議において機能していると言える。それが、T・ツァラやレーニンまで出て来る芸術論争である。ツァラやカーは結局「芸術のための芸術」論争の周りを回ってしまうだけであるが、レーニンは「芸術は社会に奉仕すべき」であるというドグマを主張し、結果としてその共産主義芸術論の愚劣さを示すこととなる。これは、まさに人類の歴史におけるフェースである（ことは、後の時代である1995年に生きる我々にはわかることであるのだ）。これはストップパードが、ワイルドの言う「芸術のための芸術」という立場を暗黙のうちに認めたことを示していると言えよう。

このように見ると、コラージュとして創られた *Travesties* において、ストップパードの表現しようとしたものを超えて、コラージュの一片であるワイルドの名前が、その時代のさまざまな言説との関わりの中で、関係性を主張し、それがまた批判の軸となっていると言える。ワイルドの名前のこうした用いられ方は、彼が生きていれば、ひょっとすると彼自身面目躍如というところかも知れない、これはまた手のつけられないワイルド (wild) なオスカー・ワイルドという人物の存在を我々に感じさせるものでもある。

Wilde の喜劇と COMEDY OF MANNERS

——大衆文化と芸術の接点——

原田 範行
(杏林大学専任講師)

Wilde の喜劇、特にその最終作 *The Importance of Being Earnest* には、新聞や娯楽小説をはじめとするさまざまな出版物と、それによって体现される大衆文化への言及が散見される。Wilde が、一般に喜劇を執筆する際、実際にそうした出版物から着想を得たり、構成を借用することがあったという事実を勘案すると、*Earnest* におけるこうした言